1611 年慶長奥州地震津波に関する史料と評価をめぐって

蝦　名　　裕　一

1．はじめに

慶長 16 年 10 月 28 日（グレゴリオ暦 1611 年 12 月 2 日）に現在の北海道・東北地方において発生した地震・津波は、『理科年表』（国立天文台、2019）などでは慶長三陸地震津波と呼ばれ、地震規模はマグニチュード 8.1、昭和 8 年（1933）3 月 3 日に発生した昭和三陸地震津波と同程度、とみなされている。東日本大震災以降、この地震・津波に関する歴史資料の再検討により、従来の過小評価を脱却し、より大きい地震規模である慶長奥州地震津波としての見直しがはかられた（蝦名 2014）。

また、『王代記』における奥州の津波に関する記載から、享徳 3 年（1454）に東北地方太平洋沿岸で発生した津波の存在が指摘され、日本海溝沿いの津波の歴史像は大きく見直されることになった（行谷・矢田 2014）。同時に、東日本大震災の被災地となった東北地方太平洋岸沿岸の各地で、貞観 11 年（869）に発生した貞観津波と平成 23 年（2011）の東日本大震災との津波堆積物の間から、新たな津波堆積物が発見された。これについては、享徳津波によるものとみる見解もあったが（澤井 2017）、岩手県野田村の堆積物の調査結果から、現段階では、慶長奥州地震津波である可能性が高いとみられる（Ishizawa2022）。また、岩沼市高大瀬遺跡から発見された津波堆積物について、近世における開発痕跡の存在や花粉調査によって、慶長奥州地震津波によるものである可能性が高いという見解が示されている（川又 2022）。一方で、慶長奥州地震津波の研究に対しては、「震災史観」という批判としてその史料分析を疑問視し、その地震規模はより小さいものとみるべきとする批判も依然として存在する（菅野 2013、斎野 2016）。

今日の慶長奥州地震津波をめぐる議論については、歴史地震・津波研究において史料とどのように取り扱うか、慶長奥州地震津波の史料をめぐる状況や、過去の研究史の中で過小評価された過程を分析するとともに、学際連携による歴史地震・津波研究において、歴史学研究の史料分析をどのように位置づけるかを考えることにする。

2．慶長奥州地震津波に関する史料と評価の変遷

(1) 慶長奥州地震津波の史料の検討

慶長奥州地震津波について記述した史料は、当時の松前藩、盛岡藩、仙台藩、相馬中村藩など、現在の北海道から東北地方太平洋沿岸地域に分布している。しかし、江戸時代初期という時代的制約上、同時代史料の数は少なく、その記述も浸水地点を特定できるほど詳細なものではない。

同時代史料としては、この地震・津波を直接体験したビスカイノによる『ビスカイノ報告』があり、越喜来地方での津波発生や、今泉（現・陸前高田市）や相馬中村（現・相馬市）における被害につい

て記している。江戸に滞在していた公家の日記『言緒卿記』や『慶長日件録』は、江戸でも大地震があったと記している。仙台藩沿岸では、『真山記』に大地震の後に津波が襲来し、1783 人の死者があったことを記している。また、家康の側近が記した『駿府政事録』は「千貫松」に津波が襲来したことを記しているが、記述には不可解な点もあり、情報の錯綜がみられる。

津波発生後に成立した史料としては、『松前家譜』に松前藩東部で津波があり、民衆やアイヌに死者があったこと、相馬中村藩の『利胤朝臣御年譜』には沿岸部に津波によって藩内に 700 人の死者があったことを記している。盛岡藩の沿岸部では、山田地域の『武藤六右衛門所蔵文書』に大地震が 3 度あり、その後の大津波で山田や津軽石、大槌で多数の溺死者があったと記している。宮古地方の『小本家記録』では、津波発生年を慶長 19 年（1614）としており、また大槌地方の『大槌古城物語』では、津波発生年を元和 2 年（1616）とし、朝より地震が続いた後、津波によって大槌で多数の溺死者があった事を記している。

これらの史料の情報から、慶長奥州地震津波では、大槌から江戸にかけた広範囲の地震と、北海道南部から相馬中村藩にかけての津波被害があったと定義できる（図 1 参照）。また、史料の成立過程についてまとめたのが表 1 である。それぞれの史料は、当時の松前藩、盛岡藩、仙台藩、相馬中村藩の地域において個別の情報源から成立したものであり、複数の史料が慶長奥州地震津波の存在を記している。

(2) 先行研究における慶長奥州地震津波の過小評価

慶長奥州地震津波について、今村明恒は貞観津波と同程度の「大の大」と評価している（今村 1934）。しかし『日本被害地震総覧』では、地震被害の記述がみられない事から、震害は軽かったとし（宇佐美 2003）、さらに『日本被害津波総覧』では、宮古や陸前高田では地震を「無感」として地震は非常に小さいとした（渡辺 1998）。確かに宮古の史料には地震動があった記述は無いが、それを無感とするのは、他地域の史料の記述と整合性がとれない。つまり、詳細な描写が少なさを地震

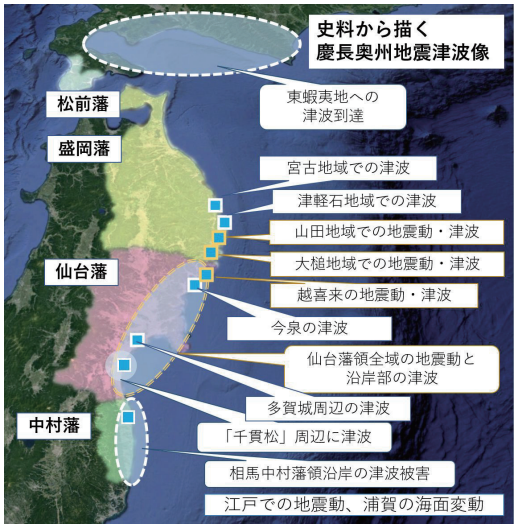

図 1 . 史料から描く慶長奥州地震津波像

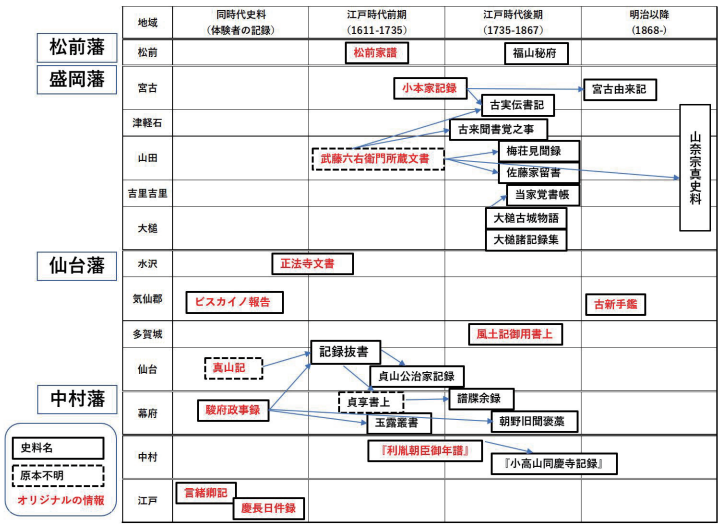

表 1 . 慶長奥州地震津波関連資料の成立と記述の継承

津波の過小評価へと直結することで、慶長奥州地震津波の史料全体から分析する視点を欠いていたといえよう。同様に、慶長奥州地震津波研究を「震災史観」として批判する論も、現段階では『駿府政事録』の矛盾点への指摘に留まり、他地域の史料も含めた論証には至っていない。今日の享徳地震津波も含めた東北地方太平洋沿岸の歴史津波像に関する最新の研究状況の中で議論するためには、地震津波を過小評価する先入観を取り払い、関連史料から網羅的に分析する必要がある。

（3）江戸時代初期における史料的制約―元和２年仙台地震の分析から―

この時代の歴史地震研究における史料的制約について、元和２年７月28日（1616年９月９日）の仙台地震についてみていきたい。『譜牒余録』や『貞山治家記録』によると、仙台城の石垣・櫓が破損し、『イギリス商館長日記』にも江戸において強震があったことが記されている。このように広範囲で、仙台城の石垣を破壊する地震でありながら、この地震については家屋被害の記録は存在しない。つまり、この時期の史料の特徴としては、甚大な被害が生じなければ地震被害についての記述が残らないという、歴史災害における江戸時代初期の史料的制約をみることができる。

一方で、この仙台地震について、『日本被害津波総覧』では寒風沢島における津波伝承を根拠に、津波が発生していたと記している。しかし、その情報源となった『塩竈市史６（資料編２）』（塩竈市史編纂委員会1985）では、津波は「永禄年間」と記している。さらに、この津波については、大槌地方において慶長奥州地震津波の発生を元和２年（1616）とする誤りが、戦前戦後の歴史津波研究の中で採用された結果、これが引用されて寒風沢島の津波伝承が元和２年（1616）によるものと定義されてしまったのである。ゆえに、歴史地震研究を進める上では、既存の歴史地震研究のイメージに依存するのではなく、改めて史料や情報源に立ち返り、災害の該当箇所のみならず、網羅的に史料を読み解いていく必要がある。

3. 学際的歴史地震研究における歴史資料の位置

慶長奥州地震津波は、江戸時代初期という時代ゆえに記述に乏しいという史料的制約ゆえに、津波の浸水範囲や実態を詳細に描くことができず、かつての研究の中で過小評価されることになった。しかし、史料を網羅的に調査・分析していくことで、面的な被害状況を描くことができる。

今日、考古学や地質学によって東北地方太平洋沿岸の歴史津波について新たな研究成果に出されているのに対し、史料的制約を理由にその実態解明を放棄してはならない。歴史学においては、史料における災害の記述のみならず、史料全体の記述や周辺史料を含め、その成立や相互比較といった広い視点で分析面的な地震・津波の状況を描くことが必要となる。その歴史学研究の成果と、考古学・地質学をはじめとする様々な研究分野の実証的な成果と連携した学際的研究を展開することで、史料的制約を超えた慶長奥州地震津波像が浮かび上がってくるはずである。

参考文献

蝦名裕一，2013，慶長奥州地震津波の歴史学的分析，宮城考古学，15，27-43.

今村明恒，1934，三陸沿岸に於ける過去の津浪に就て，地震研究彙報別冊，1，1-16.

川又隆夫，2022，岩沼市高大瀬遺跡で発見された慶長奥州地震津波堆積物について，シンポジウム歴史が導く災害科学の新展開Ⅴ―文理融合による 1611 年慶長奥州地震津波の研究―報告書，28-33.

菅野正道，2013, 慶長地震の評価をめぐって，市史せんだい vol.23，22-28

行谷佑一・矢田俊文，2014，史料に記録された中世における東日本太平洋沿岸の津波，地震，66，73-81.

斎野裕彦，2016，津波災害痕跡の考古学的研究，同成社，197-211.

澤井祐紀，2017，東北地方太平洋側における古津波堆積物の研究，地質学雑誌，123（10），819–830.

塩竈市史編纂委員会，塩竈市史６　資料編 2.

Takashi Ishizawa, Kazuhisa Goto, Yuichi Nishimura, Yosuke Miyairi, Chikako Sawada, Yusuke Yokoyama, Paleotsunami history along the northern Japan Trench based on sequential dating of the continuous geological recordpotentially inundated only by large tsunamis, Quaternary Science Reviews 279-1. https://doi.org/10.1016/j.quascirev.2022.107381

宇佐美龍夫 , 2013, 日本被害地震総覧 599-2012, 東京大学出版会 .

渡辺偉夫，1998，日本被害津波総覧（第 2 版）．東京大学出版会，238pp

Research on Historical Documents and Evaluation of the 1611 Keicho Oshu Earthquake Tsunami

EBINA　Yuichi

Abstract

This study is a consideration of the analysis and evaluation of historical documents related to the Keicho Oshu earthquake tsunami that occurred on December 2, 1611.The historical documents describe an earthquake from Otsuchi to Edo and a tsunami along the coast from Hokkaido to Tohoku. However, the descriptions in historical documents have been partially ignored and underestimated. When researching historical earthquakes and tsunamis, it is necessary to comprehensively analyze multiple historical documents.